岩手大学教育学部附属教育実践研究指導センター研究紀要　第8号（1998）pp.17－29

日本人にとってのサクラ教材と韓国のムクゲ教材

井　上　雅　夫*
（1998年1月5日受理）

Masao INOUE

Teaching Material of National Flowers
of Sakura in Japan and Mugunfa (Althaea) in Korea

桜はわが国の国花である。第2次大戦の終戦までは国語・理科においてもそのことが意識される教材としてサクラが扱われていた。しかし日本の植民地であった朝鮮の人々にとってはムクゲが民族の花であり，サクラは侵略のシンボルの一つと考えられた。本論文は国花は身近な素材としての花教材以上の意味を持つことを論じたものである。

〔キーワード：教材，サクラ，ムクゲ，韓国・朝鮮〕

は　じ　め　に

筆者は学部ならびに大学院の理科教育分野の授業科目を担当している。そのための教材研究の一つとしてサクラについて調べはじめたが，すぐにそれが植物教材以上の意味を持っている事実に気づかされることになった。すなわち，かつての朝鮮において日本の国花サクラを侵略のシンボルとしてとらえられていた事実を教えられたのである。その結果，筆者の教材研究の対象は，わが国におけるサクラ教材の取扱い，韓国・朝鮮人の国花ムクゲに対する思いに向けられることになった。

Ⅰ　韓国・朝鮮人にとってのサクラ

李淑子は，かつての朝鮮の初等教科書に登場したサクラを国家主義的語彙の一つととらえる。

> 巻三第三課は「ウメとサクラ」と題しているが，朝鮮総督府編纂の教科書（『普通学校国語読本』1912－15年発行）に桜の花が出てくるのはこれが初めてである。この時はさし絵も梅の花と一緒だが，後には桜の花だけとなり，日本の国花として，いわゆる「国民性の涵養」

*岩手大学教育学部

に役立てられるようになった。なお，朝鮮にあまりなかった桜は，教材としてだけでなく，実際に朝鮮人子弟の学校のまわりにも植えられて，より一層「国民性の涵養」に役立てられたが、解放と同時に伐採されることが多かった。この課には，次のような文が記されている。

ワガ　日本　ノ　サクラ　ホド　キレイナ　ノ　ハ、ホカ　ノ　クニ　ニハ　アリマセン。

朝鮮　ニハ、サクラ　ヤ　ウメ　ハ、タクサン　アリマセン。ケレドモ　内地　ニハ、タイテイ　ドコ　ニモ　アリマス。[1)]

こうしてサクラが登場する一方で朝鮮の教科書からムクゲが姿を消した。サクラとムクゲは開花時期が違うのだから，サクラを以てムクゲに代えたのではない。ムクゲを抹殺したのである。だから，解放（1945年）後に韓国で『初等国語読本』を作成することになり，教材内容の選択基準の一つとして「我が国の国民精神を昂揚させるようなもの」が朝鮮語学会によって示された時，

国旗の太極旗と国花の無窮花は，「国民精神の昂揚」のために，まず最初に教科書に入れられなければならない教材であった。[2)]

のである。

Ⅱ 日本人とサクラ

かつて朝鮮人がサクラを日本の国家主義のシンボルととらえたことは，日本側の資料でも肯定できる。

たとえば，中塚明はサクラを日本人の天皇への忠誠の象徴ととらえている。

サイタ
サイタ
サクラ　ガ
サイタ

小学校一年生の，まあたらしい国語の教科書の第一ページが，「サクラ」ではじまるようになったのは，「満州事変」の起こった翌々年の１９３３（昭和８）年からである。「サクラ」についで，「ススメ　ススメ　ヘイタイ　ススメ」がつづいた。小学校にはいって十日もたたないうちに，すべての日本の子どもたちは，日本人の天皇への忠誠の象徴としての「サクラ」と「ヘイタイ」をおしえられたのである。[3)]

わが国の理科ではどのように取り扱ったのであろうか。1930年代に刊行された教師用参考書を見よう。

岡田弥一郎『小学教材を主としたる博物学提要』（三省堂，1932年）では，下記のように，サクラの学習（尋常４年・第１課）を示している。

要旨　普通植物の一例として，サクラを取り，幹・枝の外観，葉・花の発現する有り様及び花の形態・生態について教ふ。

教授事項　1．幹・枝　2．葉・花の発現　3．花の形態　4．花の生態[4)]

ここでは，サクラを一個の植物として取り扱うのみである。しかし，松原益太『小学植物教材研究』（培風館，1935年）は，下記の(5)に見られるように，植物としての学習の範囲を越える方面にも目を向けた教材観を提示している。

§1．教材観

(1) サクラは我が国では普通の植物で，種類が頗る多く観察材料とするには極めて好都合である。

(2) 種子植物としての花の構造は模式的で，しかも数多く生じ且つ観察に適当な大さである。

(3) 生態的取扱をするのに恰好の材料である。

(4) 花の開舒が葉の展開と同時であるか又は略ぼ時を同じうするから，葉と花との発育の状況等の如き生態的事項を併せて教授し得る。

(5) サクラは古来我が国民生活と深い交渉をもち，詩歌，絵画は勿論一般の美術工芸品に競つて其の美性をあらはされて居る。特にヤマザクラの如きは我が日本精神を象徴するものとして讃美せられ，純然たる「国花」と仰がれて居る位である。[5)]

当時，このような教材観に則した授業が行われていたかどうかはわからないが，長野県松本市にあった開智学校における1899（明治32）年度の理科教案を見ると，植物学習の対象とのみ限らないサクラの学習がかなり以前からあったことがわかる。

第5週　自5月2日　至仝　6日

題目

桜（前週ノ予定ナリシガ祭礼ノ為メ本週ニ越シタルヲ以テ少シク花ノ期節ニ後レタリ）

一、花

桜花一輪ツヽ各生ニ与ヘテ観察セシム

花ハ何ノタメニ開クゾ

実ハ何ノタメニ結ブゾ

種子ハ何ノタメニ生スルゾ

教授

（新体理科書第一章桜ニヨル）

（尋常読本花ノ課参考）

一、花ノ部分

其淡紅色ヲ帯ブル美ナル部分ヲ何ト呼ブカ

（中略）

応用

我ガ国ニ於テ桜ノ名所ヲ知レルカ

（高等読本一第三課参照）
桜ハ我国特有ノ花ニシテ外国ニモアレドモ遠ク及ハス
敷島の倭心を人とはゞ
朝日に匂ふ山桜ばな
花ハ桜木人ハ武士　桜ハ花にあらはる[6]

応用の内容として示された「敷島の……」は本居宣長の歌であり，かつては日本精神を唱った和歌として「愛国百人一首」にも加えられていた。「花は桜木人は武士」もその一つの解釈としていさぎよさを桜と武士の共通性ととる場合には，やはり日本精神をあらわすことになる。

Ⅲ　韓国・朝鮮人にとってのムクゲ

中塚明はムクゲについてつぎのように述べる。

桜が日本の花であるように，木槿は朝鮮の花である。（中略）
ところで，木槿とはどんな花か。われわれ日本人はあまりよく知らない。
木槿は夏から秋にかけて，うすむらさき，うすべに，しろ，などの一重か八重の花をつける潅木である。ちょうど桜が日本人にしたしまれ，日本の国花とされてきたように，木槿は朝鮮で，はやくから人びとにめでられ，夏ともなれば，家いえの垣根にいっぱい花をつけた。
しかし，木槿はそれほどきれいな花ではない。美しいのがこの花の特色ではないのだ。朝，露をふくんで咲いたのがしぼめば，ほかの蕾がかわって咲き，これが晩に生気を失えばまた咲き，しぼんでは咲き，しおれてはまた咲き，ひたすら咲きつづけるのが，この花の特色である。一夜の嵐に，ぱっと散る桜とは対照的である。（アンダーラインは筆者）[3]

庭木や生け垣など随所でムクゲを見かけるから「日本人があまりよく知らない」とは言えないし，きれいと感ずるか否かは人それぞれによって異なるから「それほどきれいな花ではない」とも断定できない。しかし細部はともかく，以下に示すような韓国・朝鮮の人びとのムクゲに対する強い思いを多くの日本人が知らないと思われる。

日本人は木槿が朝鮮の国花として，朝鮮人に愛された花であることを，ほとんどよく知らない。そして木槿が「無窮花」と書かれることもあることを知っている人は，さらに少ない。いったい，木槿はなぜ「無窮花」と書かれるようになったのか，またそれはいつごろからだろうか。
木槿に「永遠にきわまりない花」という意味の字をあてたのは，その花の特色からである。つぎつぎに咲きつづけるその花に，朝鮮の人たちは滅びることのない，永遠の力を感じたのである。
木槿が「無窮花」と書かれたのは，そう古いことではない。日清戦争もすんだあと，当時，外国の勢力がとうとうとおしよせ，国の独立が危ぶまれたとき，祖国の独立をまもるために心をくだいた朝鮮人が，愛国の歌をつくり，「無窮花三千里花麗なり江山」とその一節にう

たったのが，はじめという。

「無窮花」は，その後，朝鮮が主権をうばわれ，国が植民地となって滅ぼされ，朝鮮民族の悲しみが大きくなればなるほど，朝鮮人には，いっそう忘れがたい花となった。

そして，それだけに木槿はいっそう大きな災厄をこうむらなければならなかったのである。なぜなら，その花に，朝鮮はどのような圧迫にも滅びることはない，という気概を託されたこの木槿は，朝鮮国を滅ぼし，朝鮮人から，その民族の心を抜きとろうとするものにとって，きわめてやっかいな花であったからである。

朝鮮が植民地にされてからは，木槿は満足に咲くこともむずかしくなった。いたるところで切りたおされ，たきぎにされてしまった。「無窮花」の由来を書いた新聞は発行を禁じられた。[7)]

独立後まもない頃の文教部編国語教科書『国語』(1952-54年発行）巻10第7課にはつぎの詩「無窮花」が載っている。

津々浦々おりおりの花は咲けども
われわれはどの花よりも
無窮花を愛す
わが民族の花　無窮花よ

この国に　無窮花の花
ふたたび咲くが　そのむかし
大声あげて女真族らが押しよせて来た
折れた無窮花をそっとつちかう
白頭山の山なみには香りが高い
数多くの先烈が血を流した花ばたけ
賊どもが群をなして踏みこんで来た

白い服の聡明なわが兄弟は
奥ゆかしい心の一房の無窮花
輝かしい三・一精神うけついで
自由の旗下で手をつなぎ
すべての仇を押し返す[8)]

もう一つキム・ハクヒョン（金学鉉）の「ムグンファの花－K君への手紙－」の一部を紹介しよう。

夏から秋にかけて咲くムグンファ（むくげの花）が朝鮮の国の花です。朝，いきおいよくつぼみを開いて咲き誇り，夕にひっそりと身をとじる。素朴で可憐な花です。華やかにパッと咲いて，ひらひらと散っていく短いいのちのサクラや華麗なバラの花のように，見た目には美しい花ではありません。そこらの道端や線路の沿線に咲くムグンファの花は，他の花に

くらべて花のいのちが長いところに特徴があります。

わたしは，ムグンファの花に，わが国朝鮮の歴史が象徴されていると思います。東アジアのいっかく，大国にはさまれた半島にわたしたちの先祖が住みついておよそ二千年，数多くの外国の侵略をうけながらも，独自の文化をつくりあげてきました。侵略があるたびに民衆は抵抗をつづけ，はねかえしてきたのです。一時期，日本の不法なしうちによって植民地になったり，蒙古軍によって国土が踏みにじられたことはありますが，その間も根づよい抵抗はやすむことなくつづけられました。ムグンファの花は，こうした朝鮮人のたくましい生命をよくあらわしています。[9]

これまで述べたことから，韓国・朝鮮人にとってムクゲとは，「国花」ということばよりも「民族の花」ということばの方がより適切ではないかと私は思う。だからこそ，前述の李淑子の表現のように「国旗の太極旗と国花の無窮花は，『国民精神の昂揚』のために，まず最初に教科書に入れられなければならない教材であった」のである。現在子どもは国民学校１年生からムクゲを教科書で目にすることになる。すなわち，国民学校第１学年の教科書『わたしたちは１年生』[10]・『賢い生活』[11]のいずれも，表見返しに「愛国歌」（国歌）の楽譜・歌詞と「太極旗」（国旗）およびムクゲ（国花）の絵が載っている。
そしてさらに国民学校（わが国の小学校に相当）・中学校・高等学校いずれの学校のいずれの教科の教科書（ほとんどが国定である）においても，巻頭に「国民教育憲章」[12]（状況の変化を反映してか，最近の教科書には載っていない[13]）を載せるとともに，国民学校の教科書の多くが扉にムクゲの花のシンボルマークを載せている。

教科書中でもムクゲは写真・絵で登場することが多い。歌でも，国民学校「音楽」教科書の第５学年で「ムクゲ行進曲」[14]，第６学年で「ムクゲがまた咲いた」[15]が歌われる。

Ⅳ　韓国の春の花

前述したように，ムクゲは初夏から夏にかけての花であり，サクラが散った後に至るところで見られる花である。両者の咲く時期は重複していないのであるから，教科書には両方載っていてもかまわないわけである。しかし韓国・朝鮮人にとって民族の花と言ってもよいムクゲは教科書から抹殺された。そして，李淑子が言うように朝鮮にはあまりなかったサクラが教科書に登場した。

それでは，韓国では春の花を挙げるとしたらなにがあるのか。筆者は教材研究の範囲をさらに広げた。

国民学校第４学年の国語読方教科書につぎのような記述がある。

レンギョウとツツジ

さらさら流れる小川の水の音とともに暖かい春がやってくる。

黄色いレンギョウが枝ごとにびっしり咲いて，春の便りを伝えてくれる。山でも桃色のツツジが顔を見せ春風に揺れる。寒い冬を耐え抜き，ぱっと咲いたレンギョウとツツジを見れば，われわれの気持ちは浮き立つ。そして美しい心を持つ者であれば，花をいっそう大切にし，愛するようになる。

春にはたくさんの花が咲く。なかでも春を告げるレンギョウとツツジが一ばん目をひく花だ。

はるか遠い昔から，春が来ればわれわれの祖先たちがながめた花，数千年の間われわれの同胞と温かい情を交わしてきた花が，レンギョウであり，またツツジではないのか！

目をひく華麗な花として，ボタンやバラがあり，香りが良い花としてユリやライラックがある。また，色とりどりに咲くホウセンカやアンズもあるが，レンギョウとツツジとより気が合う。

レンギョウとツツジは，黄色と桃色の一色で咲き，たいしてかわいらしくは見えない。しかし，わが国のどこにでも見られ見慣れている花であるから，われわれの気持ちがいっそうひかれるのである。

それで，レンギョウとツツジは，春を知らせる，われわれが好む花である。村々の垣根に黄色くほほえむのがレンギョウであり，漢拏山から白頭山まで春の山を赤く染めるのがツツジである。

道端で毎年春の便りを伝えてくれる黄色いレンギョウを見ると，久しぶりに会った友人のように親しみを感じられるし，なつかしい。また，雪がとけた山の日向側に咲くツツジを見ても，われわれの心はいっそうなごむのである。

このようにレンギョウとツツジが咲く春の日の下で育つわれわれであるから，親しみとなごやかさで春を迎えるようになる。

昔から，わが国の乙女たちは，黄色いチョゴリに桃色のチマを好んで着た。黄色いチョゴリはレンギョウの花と同じ色であり，桃色のチマはツツジの花と同じ色である。

黄色く咲いているレンギョウとともに暮らし，桃色のツツジを見て飾らない気持ちを育んで来たのがわれわれの同胞である。レンギョウ村とツツジ山で黄色いチョゴリに桃色のチマを着た乙女たちが初春を迎えて跳びまわって遊ぶ姿は，わが国でのみ見られる麗しい光景である。(中略)

暖かい春になり，恥ずかしそうに赤く染まって岩の割れ目に隠れて恥ずかしげに咲くツツジは，村々を黄色く染めたレンギョウとともに，われわれの心をおだやかにしてくれる。

花はいつ見ても美しいのだ。美しいものを好む人はいつも花を愛する心を持つようになる。また，花を愛する人は善良で美しい心を持つようになる。[16)]

このように，朝鮮人は昔からレンギョウとツツジのような美しい春の花を持っていたわけである。現在では鎮海の花見のようにサクラの花見も行われるようであるが，サクラを植えなければ春の花に事欠いていたわけではない。

どの土地でもそこに住む人びとに長年親しまれてきた自然がある。朝鮮の春の自然に持ち込まれたサクラは無用の客であったことは想像に難くない。ここで私は目を戦前の満州（現在の中国東北部）に向けてみよう。朝鮮の北方に位置していた満州は「花の満州」と呼ばれ，多数の日本人子弟が居住していたが，そこでは，学校教育で春の花としてなにを取り上げたのであろうか。また，サクラはどのように扱われたのであろうか。

V　満州とアンズの花

旧満州では多数の日本人子弟が国民学校の教育を受けた。筆者もその一人である。当時の『教師用指導書』を基に上記の問題を検討してみよう。

国民学校時代，国民科に「大陸事情及満語」という教科目が設けられていた。その任務はつぎの通りである。

大陸事情及満語の任務

大陸事情及満語は、国体の精華を明らかにして国民精神を涵養し、皇国の使命を自覚せしめる国民科の目的を全うするために、在満日本人教育の特殊性に応じて設けられた教科目の一つであつて、

満洲及ビ東亜ニ関スル事情ノ概要ヲ知ラシムルトトモニ簡易ナル満語ヲ習得セシメ、大陸ニ於ケル皇国民ノ使命ヲ自覚セシムル

ことをその任務とする。[17]

ここで，「国民精神を涵養し」ということばが出ている。朝鮮においては，サクラが国民性の涵養に役立てられた（李淑子，前出）が，国民科大陸事情及満語教科書の『マンシウ　一』では，サクラはどのように取り扱われているのであろうか。

満洲では5月がサクラの咲く時期なのであるが，初等科第一学年の教材月別配当で5月の教材としては「アンズ」が取り上げられており，サクラではない。教科書の挿し絵も，アンズの花盛りのうららかな田舎の春景色がつぎのように描かれている。青空にそびえる古塔。満人の農家と，その庭に咲くアンズ。石を積み重ねた塀のそばに休むロバ。花摘みをしている姉と弟，そこへ近寄ってくるアヒル。

サクラはどこへいってしまったのか。『マンシウ　一　教師用』には「指導上の注意」として4点を挙げ，そこでサクラのことについて触れている。

一、杏の花につづいて他の花が次々と咲くのであるから、自然の観察一の「庭の花」と連絡し、機会あるごとにそれらを観察させて、「美しい満洲」が印象されるやうに導く。

二、教材は「アンズ」であるが、これは満洲の代表的な花の意味であつて、これに限る必要はない。桜の咲く地方ではそれも取扱ふがよい。芍薬・鈴蘭・かきつばた・翁草などの咲く地方では、それにも着眼して取扱ふ。

三、日本では春になると桜の花が美しく咲くこと、桜の花と杏の花はたいそう似てゐることを知らせる。

四、地域的に見て開花に遅速があるから、土地の情況に合ふやうに五月の教材を移動することも差支へない。[18]

なにがなんでもサクラを学習させるという姿勢がなかったことが，上記の文からうかがえる。一で述べているように，「美しい満洲」が印象されるために，満洲の自然をそのまま受け入れたと言ってよいであろう。そのことはこの「三　アンズ」の「教材の要旨」と「教

材の解説」を読めば明確にわかる。

教材の要旨

杏の花咲く春の満洲の自然美を鑑賞させ、前課（筆者注　「二　マンシウ」）と同様に郷土愛好の念を養ふ教材である。長い冬が去つて急に暖かくなると、昨日まで寒さにいためられてゐた満洲の野も山も庭前も、さまざまな花によって一度に飾られる。かうした花の装ひは、冬篭りが特別長いだけに、満洲の人たちにとつてはこの上ない喜びである。本課はこの自然の恩寵に浸らせて、「花の満洲」「美しい満洲」といふ情感を感得させるのである。

教材の解説

四月は、内地では春の半ばであるが、満洲では冬の終りか春の序の口である。北満では漸く解氷のはじまる頃であるが、南満ではさすがに暖かく、花の便りをきくことができる。五月ともなれば、北満の自然も南満とほぼ歩調が揃つて来る。概して満洲の春は短い。殊に北満は冬から一足とびに初夏に入る。本課はその短い春、それだけに力強い満洲の春の生命に輝く花を取扱ふのである。

満洲では内地の梅に代る杏の花が先駆となつて、桃・ゆすらうめ・ライラック・桜・梨・林檎・ぼけなどの花が一度に咲揃ふ。野原には緑の草が萌え、すみれ・たんぽぽ・ねぢあやめなどの花が咲乱れる。

「花の満洲」には、湿気の多い内地の春にみる春霞や花曇の趣はないが、蒙古風の過ぎた後の晴渡つた空の下に、あたたかく咲いてゐる杏の風情は、まさに大陸の持つ情趣である。杏にはたしかに満洲のにほひが豊かである。この花が、山に丘に野に畑に人家の庭に咲乱れた眺は、日本の桜にも比すべきものがある。とりわけ美しいのは、民家のほとりに咲いた杏である。杏に囲まれた満人部落を眺めると、伝説の桃源のやうな、のどかな安らかな感じが起る。杏の咲いた農家の庭に立つと、そこの満人も驢馬も家鴨も鶏も、明かるい平和な夢にとけ合つたやうな姿に見える。挿画は、この風景に着眼して描かれたものである。[19]

いちおう「我が大和民族が指導的地位に立つ民族協和」ではあったが，このように柔軟とも言える指導がなぜとられたかは，かいらいとは言え満州国は国であったとか，五族協和の楽土をめざしたとか，いくつかの理由が考えられるとは思う。ムクゲの抹殺，サクラの押しつけの姿勢で臨んだ朝鮮への対応とはまるで異なるのである。

Ⅵ　大学生のサクラ観

今日の大学生は，ムクゲが民族の花と言えるほど韓国・朝鮮人の愛する花であることを知らないのではないか。また，サクラが朝鮮人に侵略のシンボルとみなされたことも知らないのではないか。大学生は「サクラ」と聞いてなにを思い浮かべるのであろうか。それをつぎのような方法で調べてみた。

筆者が担当する小学校理科教育法の講義において受講生 121名に「サクラ」という語を連想の出発点としてつぎつぎに連想するものを書かせてみた。「サクラ」のつぎに書いたことばを連想第一語とする。すなわちサクラと聞いて真っ先に思い出す語である。それは各人１個とは限らないが，つぎのようなものが挙げられた。それを第15位まで示す。

1位	春	74名（61%）
2位	桃色・ピンク	39名（32%）
3位	花見	31名（26%）
4位	入学式	19名（16%）
5位	花	16名（13%）
〃	サクランボ	16名（13%）
7位	梅	14名（12%）
8位	さくら餅	13名（11%）
9位	花びら	11名（ 9%）
10位	石割桜	9名（ 7%）
11位	吹雪	8名（ 7%）
12位	ワシントンＤＣ	6名（ 5%）
〃	木	6名（ 5%）
〃	歌	6名（ 5%）
15位	日本	5名（ 4%）

第10位の「石割桜」だけは解説を加えねばならないと思う。岩手大学は盛岡市にあるが，石割桜は盛岡地方裁判所構内（盛岡市内丸）にあるヒガンザクラで，花こう岩の割れ目から幹が出ている桜で，国指定の天然記念物となっている。

「国花」という連想語は，上表に挙げた第15位に達しなかったのではなく，まったく出なかった。「日本」を連想した者も５名しかいなかった。学生たちはこの５名という人数を，多いと考えるのか，少ないと考えるのか。受講学生には集計結果に基づくレポートを提出させた。そのなかでこの問題に触れたものを示そう。

・意外と少ないと思った。 100%に近いくらいの人が「日本」という言葉を連想すると思ったからだ。しかし，サクラを「日本」などとそういう大きいものとして見るのではなく，もっと自分たちの身近なものとして考えている証拠なのかもしれない。
・私としては，もう少し多いかとも思ったのだが，意外に少なかった。「日本」から「サクラ」は連想しやすいのかもしれないが，「サクラ」から「日本」はむずかしいのであろう。
・サクラが国花であると意識する機会や必要がないためか，多くの票は集まらなかった。日本は単一民族で（筆者注　アイヌの存在を意識していないためであろう）島国であるから，「民族」を意識することがないのだ。だから，サクラの花が国花であることを知らないわけではないのだが，強く心の中に刻まれてはいないのだろうと思う。

上記３名のコメントは，「国花であることを連想する者がもっと多いと思ったのに，意外に少なかった」という考えに立っているのであるが，いっぽうではつぎのようにとらえている学生もいる。

・日本を代表する花，日本人の精神を象徴する花としてのサクラに対する思いは，若年層とも言える我々のなかでも確実に理解はされているようである。「日本の花」というものもあったが，「日本」とする人は5名おり，多いとは言えないまでも決して少ない数ではなさそうである。

筆者は，サクラと言えば国花という連想が多く出るのではないかと考えていた。ゼロという結果は驚きである。この事実をもって，サクラ＝侵略という発想を今後とも生まないととらえて安心する考えもあろうし，かつてサクラが侵略のシンボルとしてとらえられたことを教えられていないわが国の教育を嘆く考えもあろう。筆者は，きわめて単純に考えて，わが国を象徴するものの一つとしてのサクラを，小学校低学年の段階から自然教材としてのみでなく学習してもよいのではないかと考える。

結　語

理科教材としてのサクラの教材研究をはじめたのが，教科枠を越えるだけにとどまらず，韓国教科書や満洲教科書の参照，韓国・朝鮮についての勉強にまで広がってしまった。この教材研究を続けながら筆者が感じたのは，つまるところ日本理解がもっともたいせつだということである。自分のことを知っていて相手のことを理解しなければならないのである。今回はその相手は主として韓国となったが，両国の友好的な交流のためには，ただ単に日韓両国の関係についての歴史上の事実を知ることだけでなく，自然・文化・政治・経済・生活その他ありとあらゆるものを知り理解しようとする気持ちを持つことがたいせつだという思いをこれまで以上にさらに深めることとなった。筆者自身はその方法として教科書を読むのが絶好の情報源の一つであると思う。それも，韓国・朝鮮の学習を始める小学生になったつもりで読まねばならないと思う。読む内容も，日本と関連するところだけでなく，全部読むことを勧めたい。日本人に読ませることを強調した下記のような文句にひかれて本を読むことには賛成できない。

たとえば，邦訳されたほるぷ社版の韓国『国史』教科書の帯には，つぎのように書かれている。中学校用『国史』教科書[20]と高等学校用『国史』教科書[21]のいずれにおいても，「“歪曲”検定教科書にアジア諸国から非難集中。“侵略”された側の教科書に描かれた日本は…。」。そして，中学校用『国史』教科書では本文からつぎの箇所が抜粋されて帯に記されている。

「彼らは，『内鮮一体』とか『皇国臣民化』といった標語をかかげ，私たちの国語を禁止して日本語の使用を強要し，私たちの歴史教育も廃止した。…そして，日本の寺社を各地に建てて我が民族に参拝を強要した。…」

「三・一運動は，民族の独立決議を国内外に宣言した平和的闘争であり，侵略者日本から私たちの独立を取り戻すための，全世界に訴える独立万歳示威であった。しかしながら，日本は憲兵警察と軍隊まで動員して野蛮な武力弾圧を加えた。…」[20]

また高等学校用『国史』教科書では本文から抜粋されたつぎの文が帯に記されている。

「日本軍の義兵鎮圧作戦は武器をもった義兵部隊に対する討伐だけに終わらず，韓半島各所で町々に火事を起こし，良民を虐殺して，穀物をすべて奪取するという焦土作戦を使った。…」

「日本は，1945年に韓国から追い出されるまでただ一人の文官総督も任命することなく，かえって警察の数は憲兵警察のときより倍に増えた。のみならず，民族意識を抹殺しようとする高等警察というものが生まれ，監獄も増設した。…」[21]

もっとも，最近出版された高等学校国定教科書『国史』の訳書『韓国の歴史』[22]についてのカタログに見られる，「95年韓国高等学校歴史教科書の全訳。喧伝される自由主義史観に対し，歴史の真実とは何かを伝える最良の書」のように日本との関係を強調しない宣伝文句もある。

日本で刊行された韓国・朝鮮について述べた本にも，日本との関連に内容の力点を置く本が多い（たとえば，歴史教育者協議会編『知っておきたい韓国・朝鮮』青木書店[23]や尹学準監修・筒井真樹子編訳『韓国の教科書の中の日本と日本人』，一光社[24]）。日韓両国の関係を理解しようとするならば，両国に関わりのある話題に力点を置く。一見，それはもっともな姿勢であるかのように見える。しかし，私は，韓国・朝鮮を真に理解するためには，このように話題を限ってはならないと思っている。

筆者は，韓国の国民学校の教科書を読みながら，民族の誇り，そしてイコール愛国心を感じとった。「国民教育憲章」は，韓国人のアイデンティティーの表明であるが，それを読むと日本人のアイデンティティーがなんであるかを問うことのたいせつさを教えてくれる。相手を理解しても，自分が何者であるかがわからないのでは相互理解にはならない。日本人にとっては，サクラに限らず日本の自然や日本の文化その他あらゆることについて自国についての再勉強が求められるのである。このようなことをやるための時間が，若い人たちにはたっぷり残されている。私にはそれがうらやましい。

引用文献

1） 李淑子『教科書に描かれた朝鮮と日本　朝鮮における初等教科書の推移1895-1979』，ほるぷ出版，1985年，296-297頁。
2） 同書，538頁。
3） 中塚明『近代日本と朝鮮』，三省堂新書48，1969年，4頁。
4） 岡田弥一郎『小学教材を主としたる博物学提要』，三省堂，1932年，256 頁。
5） 松原益太『小学植物教材研究』培風館，1935年，1頁。
6） 「理科教案・明治32年度・高等科第１学年」，『史料開智学校　第15巻　授業の実態』，電算出版企画，1993年，402頁。
7） 前出，5-6頁。
8） 李淑子の著書（前出），553-554頁。
9） キムハクヒョン「ムグンファの花－Ｋ君への手紙－」，『サラム・生活編２』（大阪市外国人研究協議会編），ブレーンセンター，1986年，116-117頁。
10） 韓国国民学校教科書『わたしたちは１年生』，教育部，1994年。（韓国語）

11)　韓国国民学校教科書『賢い生活　1－1』，教育部，1994年。(韓国語)

12)　1961年5月16日の軍事政変によって登場したパクチョンヒ（朴正熙）は，1963年に大統領となり第3共和国が樹立された。国民教育憲章は，その政府のもとで1968年12月5日に国会の議決を経て公布された。

国民教育憲章の全文を示す。

「私たちは，民族中興の歴史的使命を帯びて，この国に生を受けた。祖先の輝かしい魂を今日によみがえらせ，内に自主独立の姿勢を確立し，外に人類共栄に寄与する時である。よってここに，私たちの進むべき道を明らかにし，もって教育の指標となすものである。

誠実な心と丈夫な体をもって，学問と技術を学び磨き，もって生まれた各々素質を啓発し，そして私たちの境遇を躍進の踏み台として，創造の力と開拓の精神を育む。公益と秩序を第一とし，能率と実質を尊び，敬愛と信義に根ざした相互扶助の伝統を受け継いで，明朗で暖かい協同精神を培う。私たちの創意と協力を土台として国が発展し，国の隆盛が自己発展の根本であることを自覚して，自由と権利の伴う責任と義務を全うし，自ら国家建設に参加，奉仕する国民精神を高める。

反共民主精神に徹した国家愛，民族愛が私たちの生きる道であり，自由世界の理想を実現させる基盤である。永遠に子孫に引き継がすべき栄光に満ちた統一祖国の将来を見通し，信念と誇りを持った勤勉な国民として，民族の知恵を集め，たゆまぬ努力を重ね，そして新しい歴史を創造しよう。」

この訳は，世界の教科書＝歴史『韓国：1』(中学校『国史』の訳書)，ほるぷ出版，1987年に載っているものを引用した。

国民教育憲章の理念，成立の経緯，評価についてはつぎの書に詳しい。

ソンインス（孫仁銖）『韓国教育運動史』(全3巻）のうち『韓国教育運動史　第2巻　1960年代教育の歴史認識』，ムヌム社（ソウル)，1994年（韓国語)。

13)　たとえば，筆者の手元にある韓国教育部発行の中学校教科書『国史』では，1993年3月発行の教科書の巻頭に載っていた。しかし1996年3月発行の教科書には載っていない。

14)　「ムクゲ行進曲」，韓国国民学校教科書『音楽　5』，教育部，1994年，26頁。(韓国語)

15)　二部合唱「ムクゲがまた咲いた」，韓国国民学校教科書『音楽　6』，教育部，1994年，46頁。(韓国語)

16)　韓国国民学校国語教科書『読方　4－1』，1994年，34-39頁。(韓国語)

17)　関東局在満教務部『マンシウ　一　教師用』，1942年（復刻　ほるぷ出版，1989年)，19頁。

18)　同書，44-45頁。

19)　同書，51-53頁。

20)　世界の教科書＝歴史『韓国：1』(中学校『国史』の訳書)，ほるぷ出版，1987年

21)　世界の教科書＝歴史『韓国：2』(高等学校『国史』の訳書)，ほるぷ出版，1987年

22)　チョチャンスン・ソンヨノク（訳)『国定韓国高等学校歴史教科書　韓国の歴史』，明石書店，1997年。

23)　歴史教育者協議会（編)『知っておきたい韓国・朝鮮』，青木書店，1992年。

24)　尹学準（監修）・筒井真樹子（編訳)『韓国の教科書の中の日本と日本人』，一光社，1989年